今日から雅歌を読み始めます。日本語では雅歌ですが、文語訳以来の名前であり、中国語からそのままのようです。英語では"Song of Songs"と訳されているように、「歌の中の歌」「最上の歌」です。最上のことを著すヘブライ語における表現です。ですから1:1は、「ソロモンによって歌われた歌の中の歌」となります。

しかし雅歌は、エステル記同様に「神」の名が一度も出てきません。さらに書簡の最初から最後まで男女の愛が歌われ、宗教的な要素がまったくでてきません。

これがなぜ聖書に留められ、神の正典とされてきたのか、不思議なことです。しかし同時に、旧約に生きたイスラエルの人々は、雅歌を主の御言葉である聖書として、用いてきた事実も忘れてはなりません。

神学者たちは、様々な解釈を行っています。私としては、まだ十分ではないですが、天地創造において規定された男女の愛に示される関係（創世記2:18-25）を、神と教会の関係、キリストと神の民の関係として描いていると理解しつつ読み進むのが一番良いかと思います。

そして新約聖書でも、夫と妻との関係を、キリストと教会との関係において語っています（参照：エフェソ5:21-25）。

そして雅歌を読むのに手がかりとなるのが、ウェストミンスター信仰規準です。ウェストミンスター信仰規準を確認することにより、ピューリタンたちが雅歌をどのように理解しているのかが見えてきます。

ウェストミンスター信仰告白10:1は、雅歌1:4の証拠聖句として挙げられています。ウ信仰告白第10章は有効召命です。主なる神が、予定に定められたとおり、救う人を聖霊によって呼び集め、主を信じる者へと導いてくださいます。つまり、神と人との関係において、主なる神が、神の民を愛してくださり、滅びから救い出し、すべてを受け止めてくださることが、大前提です。

そして10:1は最後で「しかし、かれらは、神の恵みにより進んでそうするようにされているので、まったく自由に〔キリストのもとに〕行く」と告白します。神の愛を受け取った者は、神を愛し、神を信じる者とされていきます。

雅歌は、おとめが若者に対して、慕い求め、呼びかけに応えることが語られています(1:4)。つまり、主によって呼び集められた神の民は、神の愛によって喜びを見出し、神を讃美する喜びを持つことができるようにされます。主によって捕らえられ、罪から救い出され、神の民として選ばれたことは、私たちにとって大きな喜びです。この喜びは、私たちの信仰生活において力となり、神の御名を讃美する励ましとなります。

この雅歌を読むとき、男女の淡い恋心を読み取ることができますが、私たちは、主なる神との関係にあって、これだけの親しい愛の交わりを私たちは持っているかと、問い直さなければなりません。

主なる神である若者は告白します(14)。

恋人よ、あなたは美しい。
あなたは美しく、その目は鳩のよう。

主は私たちを愛していてくださり、滅びから命へと移すために、御子を十字架にお渡しくださいました。この神の愛が、教会において一人ひとりが覚え、受けとけ取っているのか、問いかけられています。

主の持っておられる私たち人間に対する愛は変わることがありませんが、私たち人間の側は、その心が日々変わります。一時的な恋が冷め、そして教会に来ることが苦痛になる人もいます。それは主ご自身の愛を見失い、失望する場合もあれば、人間関係において傷つき、躓くこともあります。

そのために教会では、特に神礼拝における御言葉・礼典・祈りにおいて、主なる神の愛が、純粋に示されているのか、日々、確認することが求められています。

また聖霊降臨を受けた教会は、説教・礼典・祈りと共に、聖徒の交わりを求めます(使徒2:42)。教会には、高齢者から幼子まで、また様々な個性・賜物を持った方々が集っています。パウロが第一コリント12章で語るように、キリストという一つの体に、多くの部分があります。神の愛が純粋に伝えられることの大切さを顧みると共に、聖徒の交わりの大切さを顧み、教会がキリストの一つの体となることが求められています。

雅歌が語るように、若い男女が互いに思い合い、理解を深めていこうとするように、私たちも神との豊かな愛の交わり、それに伴う聖徒交わりにより、キリストの教会を形成することが求められています。

仕切り直しをして、今日から雅歌の学びを再開します。その間に、婚約式が行われましたが、主なる神が人を創造するにあたり、男と女を創造してくださったことの意義を顧みました。このことを覚えつつ、今日から雅歌を読み進むことができるのではないかと思っています。

婚約式では、創世記２章からメッセージを語らせていただきました。主なる神は人を創造したとき、男を助ける者として、女をお与えくださいました。そして互いに助け合うことにより、一つとなって家庭を形成することが求められました（参照：ウェストミンスター大教理問17）。

大教理問答は、「かれらに生きた、理性ある、不死の魂を授け、知識と義と聖性において御自身のかたちに従い、その心に書き記された神の律法とその律法を成し遂げる力とをもち」と語ります。この時点で、一方がもう一方を支配する、男尊女卑は生じません。互いが互いの弱さ・欠けを補い合い、そして一つの家庭・社会を形成することが求められました。

このとき、主に男性は男らしい性格を持ち、女性は女らしい生活を持つわけですが、それが紋切り型になるのではなく、互いの持っていない性質を補い合うことが求められます。このとき、自らの持っていないものを持つ異性に対して、あこがれを求めるようになってきます。ここに男女の恋・愛が育まれていく要素があります。

男女の交際、恋愛に関しては世俗のことであり、聖書において取り上げることに対して、否定的な方もいるかもしれません。しかし、創世記の秩序により、男と女が創造されたことを顧みるとき、男女の交際や恋愛に関して、否定的に考える必要はありません。もちろん、罪に満ちたこの世的な無秩序な状況に陥ってはなりませんが、聖書が語る秩序を保ちつつ、交際・恋愛について考えることもまた、聖書的であるということができるかと思います。

つまり聖書が第七戒違反として否定していることは、罪が混入した結果、複数の異性と関係すること、娼婦や異邦人と関係すること、同性との関係等です。しかし、結婚・男女の恋愛についてまで、聖書は否定するものではありません。

ですから、私たちは「歌の中の歌」と呼ばれる雅歌をとおして、聖書が語る男女の関係、さらには家庭から生じる隣人愛から、社会の形成・教会の形成を考えていくことができるのではないかと思います。

冒頭で「ソロモンの雅歌」(1:1)と記されています。しかし旧約聖書を読めば、ソロモン自身は、一人の女性との愛をまっとうすることができませんでした。列王記上11:3では、「彼には妻たち、すなわち七百人の王妃と三百人の側室がいた。この妻たちが彼の心を迷わせた」と語られています。

こうしたことから、ソロモンが雅歌の著者であることに対して、疑問が生じます。ソロモンの思いと、現実の生活が分離していたのか？　著者は別人だったのか？　若い頃は、純粋な信仰からの恋愛感を持っていたが、現実はそこから離れた生活を行っていたのか？ ……

しかし雅歌を読み進めますと、「王妃が六十人、側女が八十人　若い娘の数は知れないが　わたしの鳩、清らかなおとめはひとり」(6:8)と語り、ソロモンが著者であることを思わせる記述も記されています。

私たちは、ソロモンがどのような状況でこの歌を歌ったのか、あるいは別人だったのか等を詮索するのではなく、雅歌の著者が、一人の男と一人の女の恋愛を通して、主が定められた秩序をどのように語ろうとしているのかを、御言葉として聞いて行くことが求められるのではないでしょうか。

男と女が「二人が一体となる」(創世記2:24)と語るとき、互いに助け合うということも含まれますが、性的な交わりが含まれます。しかし創世記では、２章において男女のことが記され、直後の３章で蛇による誘惑によって人類に罪が混入し、主が求める男女の関係も絶たれることとなります。そのため、聖書において男女の関係に関して，否定的に語られていくこととなります。

そうした中、雅歌においては、男と女の愛の交わりに集中し、罪がまったく除去された状態とは言いませんが、本来主が、男と女の関係に求めた愛の交わりがここで歌われていると言ってよいかと思います。

その結果が、雅歌全体をとおして、神がまったく語られない、特別な書簡となっているということができるかと思います。

雅歌を読み始めたとき、男と女が究極的には神と教会の関係に例えることができるとお語りしました。そして前回は、男と女の関係を天地創造において主なる神に創造されたときの関係性（創世記2章）を確認することことが大切であるとお語りしました。雅歌は５つに分けることができます。

Ⅰ．1:1〜2:7　愛の期待
Ⅱ．2:8〜3:5　愛の形成
Ⅲ．3:6〜5:1　結婚
Ⅳ．5:2〜8:4　夫婦の愛
Ⅴ．8:5〜8:14　宣言

今日は最初の部分の御言葉から聞きます。雅歌は、おとめの恋心をもって語り始めます。「あの方」(2)と３人称を用いて、王である方への一方的な愛情表現を語りますが、直ちに「あなた」(3)と語り、まだ一緒にはなっていないが、距離的に近くにあることを表しています。

2〜3節では「ぶどう酒・香油」という言葉を用います。ぶどう酒は喜び・楽しみを象徴する表現であり、愛情表現として語られています。香油は王や祭司の任職にも用いられ、高級なものであり、単なる愛情表現に留まることなく、尊敬に値する存在として受け入れていることを語っています。

４節で「お誘いください」と語られていますが、聖書協会共同訳のように「引き寄せてください」と訳した方が、その思いが伝わってきます。

5 わたしは黒いけれども愛らしい。
ケダルの天幕、ソロモンの幕屋のように。

ケダルとは、パレスチナからメソポタミヤまで広がるシリヤ・アラビヤ砂漠の遊牧民族ですが、黒い装飾がなされた天幕を用いていたとされ、ただ黒いだけではなく、素晴らしさを物語っています。ソロモンの幕屋は「エルサレムのおとめたち」とあることから、イスラエルを意識した言葉を用いていることも考えられます。

6節で語ることは、兄弟たちにより虐げを受け、泥棒や動物に対する見張りをさせられていた状況が語られています。おとめの生きた現実の社会をここで垣間見ることができます。

そのため「教えてください」(7)と、今すぐにでも会いたい思いを伝えます。すぐ後で「顔を覆って待たなくてもすむように」と語るように、兄弟たちにより娼婦に売り飛ばされることを恐れ、それ以前に会いたい、一緒になりたいとの思いを語ります。

9〜11節では、おとめが近くにいることを知った男が、おとめを慕い、語ります。「ファラオの車を引く馬」とは、すらっとした足の素晴らしさを表現した言葉です。

そうした中、若者はおとめに「銀を散らした金の飾り」つまり最上級の贈り物を贈ろうとします。

するとおとめはナルドの香りを放ちます。主イエスの葬りの準備として、マリアがナルドの香油をたっぷり、主イエスに塗った（ヨハネ12:3）ことを連想させます。ミルラの匂い袋は没薬のことで、主イエスの誕生のとき、博士たちが「黄金・乳香・没薬」を贈り物として送ったことと重なります。

そして、コフェルの花房とは、他の訳では「ヘンナの花房」と訳されており、非常に香り高いものです。エン・ゲディは、オアシスの町です。現実の社会の中にあって、王がオアシスの存在となっています。

このように、二人の距離が非常に近くなり、互いに大切な存在として、若者は最上の贈り物を送り、おとめはそれに応え、最上の装飾をつけます（9-14）。

おとめは「シャロンのばら、野のゆり」(1)と控えみに自らのことを語れば、若者は、「茨の中に咲きいでたゆりの花」(2)と応え、周囲の状況の中で、おとめが光り輝いていることを表現します。まさにこのとき、二人は、周囲の状況をまったく見ることができない状況に陥っています。そしてその現実を、おとめ自身、自覚しています。

「わたしは恋に病んでいますから」(5)。

6節では、婚前性交が暗示されています。榊原康夫先生は、「雅歌を読む」において、結婚式がまだ行われておらず、両者が結婚の誓いを行うことにより結婚が成立したと語ります（詳細別紙）。

雅歌を読むことは私にとってもチャレンジです。しかし、主が私たちにお語りくださった御言葉として、下記のことに注意しつつ聴き続けていきたいと思います。

・主が男と女に創造されたこと。
・罪のない状態・罪を犯した後の状態の違いを理解すること。
・旧約と新約の違いを理解すること。

6 **あの人が左の腕をわたしの頭の下に伸べ**
右の腕でわたしを抱いてくだされば よいのに。

ここで語られているような婚前性交に関して、どのように解釈すれば良いのか、非常に困難なことです。榊原康夫先生は「雅歌を読む」の当該箇所の解説を記します。注意しなければならないこともありますが、私自身、納得する解説ですので、掲載させていただきます（p124-125）。

伝統的保守的な信仰の人々が雅歌に不自然な解釈を施してきた大きな原因が、この婚前性行の暗示にありますし、また反対に、大ぜいの批判的学者が雅歌には筋の進展がないと断定するのも、このすでに行き着く所まで行っている二人の仲を見るからです。そこで、私たちは、ほんとうに聖書を信仰と生活の唯一の基準としているのか、自己吟味した方がよいかもしれません。そうではなくて、どうしても二人は式まで童貞・処女であるべきだと要求する考えの底には、体を伴わぬプラトニック・ラブを美徳とする非聖書的な二元論的人間観や、結婚式を秘蹟（礼典）とする中世カトリックの教えの伝統がありはしないでしょうか。

聖書を冷静に思い巡らしてみると、結婚が神の前での契約であるという教えはあっても（マラキ2:14）、その契約がいつどのように結ばれるべきかの指示はなく、結婚式などというものはほとんど記されてもいないことに気付くでしょう。あるのは結婚を祝う宴会です。

ここの男女は結婚を願っている一組です（1:17、3:4参照）。そういう婚約者同士が、愛によって体も一つになるとき、それは実質的に二人の結婚なのであり、婚前性交なのではありません。もちろん、親兄弟や世間への社会的おひろめや神の前での誓約を抜きにして“愛してさえいれば体を与えて何が悪い”式の考え方は困ったものですが、それでも本質的には、婚約者が愛するがゆえに心身合一した場合、それが結婚なのです。これは、不品行や姦淫とははっきり区別しなくてはなりません。

旧約聖書は、結婚以前の姦淫を死をもって罰してきましたが（申命記22:20～21）、婚約者同士の式前性行を禁じたことはありませんでした。それだからこそ、ナオミはルツに、ボアズの寝室に夜這いをさせたのです（ルツ3章）。聖書が貞操を尊んでいるのは、決して物理的医学的処女性・童貞性にこだわるからではありません。結婚を誓い合った者同士が婚約者以外の人への浮気に走らないという契約上の忠実性と愛の誠実性とを尊んでいるのです。

私たちが聖書を読むのに注意しなければならないのは、ここで語られていることは、旧約の時代のイスラエルのことであるということです。新約の時代になり、現代では、結婚式において誓約が行われます。愛する男女が、神の御前に誓約することにより、結婚が成立します。だからこそ、「榊原先生が『婚前性行』を認めているから、自分達も認められている」と安直に聖書を理解するのではなく、旧約のイスラエルにおいて行われていたことが、新約の現代において、私たちはどのように解釈し、行動すれば良いのかということを、慎重に吟味することが求められているのだと思います。

今日は第二区分から御言葉を聞くこととします。第一の段落では、青年とおとめの距離が近づき、おとめは「恋に病んでいます」とさえ語っていました。

そうしたなか、今日の御言葉において、家にいるおとめに青年が会いに来ている最中、おとめの気持ちが歌われています。恋しい人が訪れたのであれば、すぐにでも家を飛び出て、迎え入れるのではないかと思いますが、このおとめは違います。

彼は山を越え、丘を跳んで、おとめに愛に来ます(8-9)。彼はかもしか・牡鹿のように、すらっとした憧れの存在です。その彼が今、家の外に立って、窓からおとめを誘い出そうとします。

このとき恋しい彼はおとめに語ります(10)。冬は終わりを告げ、雨期も終わり、良い季節を迎えています。花は咲き乱れ、小鳥の鳴き声もすがすがしく聞こえています。いちじくは食べ頃となり、ブドウも花を咲かせ、これから実りをもたらしてくれます。いちじくとぶどうは、平和と安全のシンボルです。春が来たように、男と女の愛も性も、芽生え育ち、契りを結ぼうという愛の呼びかけが行われます。

しかしおとめは出てきません。おとめが青年が嫌いだからではありません。おとめは、山々を飛び越えて、やってきた青年の姿を、しっかりと確認しています。

このとき改めて、青年はおとめに改めて語りかけます(13b-14)。おとめが、鳩のように誰がいるのかうかがい、隠れている中、出てきて姿を見せて欲しい、声を聞かせて欲しいと、懇願します。青年は、おとめに対してぞっこんです。

15節で「わたしたち」と語られています。おそらく男と女の状況を第三者的に見ている人たちが、相づち合わせているかのようです。つまり雅歌は、一つの劇において、男と女の愛が深められていく中、コーラスが入っています。

ここで語られる狐や小狐といった動物は、二人の間にある障壁のことを語っているのか、まだ彼に会おうとしないおとめを捕まえて欲しいとの青年の思いが語られているのかと思うのですが、彼のことばは、10～14節で終わっており、前者の解釈で良いのではないかと思います。

家を出てこないおとめは、青年を嫌っているのではありません(16)。たとい今一緒にいなくても、心においては一つです。

創世記２章で男に対して女が与えられたとき、「こういうわけで、男は父母を離れて女と結ばれ、二人は一体となる」(2:24)と語ったように、二人は離れていても一体のようになった状況を語っています。

しかし彼女は、彼を家に帰そうとします(17)。「夕べの風が騒ぎ、影が闇にまぎれる前に」は、協会共同訳では「日が息をつき、影が逃げ去るまでに」と訳します。翻訳としてはこちらの方が良いようです。ただ新共同訳において、「夕べ」と訳出しています。ヘブライ語原文にはない言葉ですが、「朝」と解釈されることもあるため、新共同訳は、あえて「夕べ」という言葉を補っています。夜の暗闇がなくならないうちに、ということです。

つまり、夜になり、性交を交えるのではなく、あえて帰るように語ることにより、夜の牧者としての働きを行うように促しているように思われます。会いたいけれども、今は会わないという、女心の揺れがここで歌われているのでしょうか。

そうした中、３章に入り場面が移り変わります。「夜ごと」(1)を、榊原康夫先生は夜が深まった「深夜」と訳します。２章において、夕べに、彼を迎え入れなかったけれども、それでも引き返し、彼が来るのを待っていたというのではなく、別のとき、何らかの理由で彼が抜け出し、見当たらず、探し回ることとなったように解釈します。

ここで、「恋い慕う人」は、協会共同訳では「私の魂の愛する人」と訳します(1:7, 3:1-4)。「魂」の交わり、ここに単なる肉体関係だけの男女の関係ではなく、神が求めておられる一つの家族となる交わりを求める者という意味を理解することができるのではないかと思います。

そして探し求めていた私の魂を愛する人が見つかり、そして部屋へと導きます(4)。

雅歌は、単なる男と女の愛が語られているのではありません。男と女の交わりは、魂の交わりであり、主が最初に男から女を創造されたときに求められた、一体となり・魂・霊の交わりが行われていることを、読み取っていただきたいと思います。

https://youtube.com/live/2w0rJqQ8Mbs

雅歌を読み進めるにあたり、男と女が、究極的には神と教会の関係に例えることができること、さらに男と女の関係を、天地創造において主なる神に創造されたときの関係性を確認することができることをお語りしました（創世記2章）。そして雅歌は、５つの区分に分けることができます。

Ⅰ．1:1～2:7　　愛の期待
Ⅱ．2:8～3:5　　愛の形成
Ⅲ．3:6～5:1　　結婚
Ⅳ．5:2～8:4　　夫婦の愛
Ⅴ．8:5～8:14　宣言

今日は第三区分から御言葉を聞きます。

荒れ野から花嫁の群れが上ってきます。「60人の有志、イスラエルの精鋭」(7)とあり、この輿の優雅さが示されます。そして「ソロモン王」と語り、二人の結婚は単に若い男との結婚ではなく、ソロモン王の結婚であることを語ります(7-11)。

そしてこの輿入れが、６節では、ミルラ（没薬）や乳香をたく煙の柱が近づいてくるようであると語ります。ミルラに関しては、1:13でも出てきましたが、ここでは、乳香も登場します。

主イエスがお生まれになったとき、東方の博士たちが持ってきたのが、黄金・乳香・没薬でした。輿の優雅さと共に、主イエスがお生まれになったときを彷彿させます。キリスト者（教会）にとって、主イエスの誕生は、罪の赦しと救いが完成するために求められていたお方ですが、花婿にとって花嫁を迎えることにより、初めて一人前として認められ、完成された家庭を形成するに至るのだと思います。

このことを示す言葉が、9-10「エルサレムのおとめたち」と呼ばれていたのが、「シオンのおとめたち」(11)と呼ばれていることです。「シオン」とは、天的エルサレムに結びつけられ、永遠の祝福の世界を表しており、ここで男と女が結婚することにより、一つの完成された形を物語っています。

４章に入ると若者がおとめに「恋人よ、あなたは美しい」と語り、おとめの全身を見つめます。目・髪・歯・唇・首・乳房と、上から下へと見下ろします。一つひとつ、可愛く・美しい様が表現されています。

結婚とは、心が通じ合うことが求められますが、容姿の好みも大切です。

そして、夕べが待ちきれない様子が語られますが(6)、ここで改めてミルラ（没薬）・乳香がでてきます。これらは、この結婚を象徴する言葉として語られています。

そして７節では、１節と対となる言葉が語られます。

そして８節以降「花嫁よ」、「わたしの妹、花嫁よ」と繰り返し語ります。「わたしの妹」とは、親しさ、愛らしさの表現ではないでしょうか。つまり、今まで「恋しい人」、「恋人」と呼んでいたのが、ここで「花嫁よ」と語られ、正式に結婚の誓約が行われ、夫婦となったことを物語ります。

そしてレバノン、アマナ、セニル、ヘルモン……と、いわば外国のような遠くにいる存在ではなく、結婚し、花嫁となったのだから、すぐ近くにおいでと誘います(8)。

そして９～15節で、心の交わり、そして香りについて語って行きます。ナルド、コフェルの花房、ナルド、サフラン、菖蒲、シナモン、乳香、ミルラ、アロエと、最高級の香料が並べられています(13-14)。彼にとって、彼女はそれほどまでに尊い存在であることを、物語っています。それらに命の水を注ぐように、喜びに溢れています。

最初に作られた人は、主によって与えられた女を見て、「ついに、これこそ　わたしの骨の骨　わたしの肉の肉。……」と語りました（創世記2:23）。そして二人は一体となりますが（同2:24）、この一体となるとは、単に肉体関係を持つだけに留まらず、体と心・体と魂が一体となることです。雅歌４章において歌われている歌は、まさに男が女を一体となることを歌っています。

このとき、二人は周囲が見えていません。純粋に一対一の二人の愛を育んでいます（参照：ウェストミンスター信仰告白24:2）。二人の間で、体と魂が一体であるならば、他を振り向く必要はありません。ここに罪が混入することにより、結婚・恋愛に対して、姦淫の罪が生じる原因となります。

まさに、男と女の結婚は、主なる神と教会、さらには救い主であるイエス・キリストと私たち一人ひとりの信仰のあり方においても語ることができます。

男と女が結婚することは、二人の喜び・家族の喜びですが、同時に教会における喜びでもあります(5:1)。

5:2-7の御言葉は、理解に苦しみます。結婚したばかりの男女がすれ違っています。結婚したはずの夫が深夜、妻に振られて夜の街を帰って行くのも変な話しです。ここは結婚したばかりの夫婦ではなく、恋人同士のこと・結婚する前の状況が語られていると解釈する人もいます。しかし「わたしの妹」(2)と語るのは、夫婦間のやり取りです。

聖書の各書簡は、いくつかの文書を寄せ集め、後に編集されたと解釈する人もいますが、私としては雅歌は一つの統一した歌と考えています。この時、どのように解釈すれば良いのか問題となります。ここの解釈に関して、榊原康夫先生の「雅歌を読む」を引用して紹介させていただきます(p163)。

「ここに記す解釈は、まったく私ひとりの解釈です。どのくらい賛同者が得られるか自信はありませんが、私自身としては、むろん困難はなくはないにせよ、いちばん無理なく読める解釈です。

まず、ここだけに目をとられずに全体をよく見渡すと、5:2～7の女の歌は、5:8の女の頼みで「エルサレムの娘たち」の問につながり(5:9)、それに答える女ののろけ話(5:10～16)は、はっきり「エルサレムのおとめたち」への返事となっています(5:16c-d)。そこで、次の「エルサレムのおとめたち」の言葉(6:1)がそもそもの女の頼み(5:8)に応じる形になり、「あなたといっしょに」と言ったかと思うと、とたんに女の夫婦仲むつましいのろけ話しになるのです(6:2～3)。つまり、5:2～7は、雅歌の中でも珍しい程、緊密に結びついた長いシリーズの歌の一部にすぎないのです。

この長いシリーズは、結局、“夫婦喧嘩は犬も喰わぬ”バカバカしい人騒がせであるというコミカルな歌となっています。読者はまず、このユーモラスな性格をよく飲み込んで、あまりくそまじめに考えこまずに、笑いながら聞くことが必要です。

そういう目でもう一度5:2～7をよく見ると、この話は明らかに3:1～4の夜の歌のパロディであり、先に説明したとおり、読者が3:1～4をよく知っていることを前提として書かれていることが、分かるでしょう。

これは実際にあった出来事の報告文ではありません。その証拠に、夜回りと城壁番にはずかしめられた人妻が、エルサレムのおとめたちに頼む夫への伝言は(8)、救助の願いでも被害の訴えでもないのです」。

つまり5:2～7は、3章の御言葉を顧みつつ、実際に夫婦生活が始まったときに起こった一つの出来事が歌われています。

おとめがすでに寝込んでいるところに、恋しい彼が帰ってきます(2)。彼は、彼女と性の交わりを求めています。しかしおとめは出てくることを躊躇します(3)。もう寝る気になっていたからです。

そうした中、彼は、中に入ってこようと、手を差し伸ばします(4)。おとめの心はときめき、ミルラ(没薬)が滴り落ちます(5)。

しばらくして、彼はその場を離れます。じれったくしびれを切らしたのす。夫婦間に思いのすれ違いが生じた瞬間です。

その後、起き上がったおとめも、その気になりますが、ここにはもう彼はいません。街に繰り出したい思いです。おとめは、空想の中で街をめぐり、夜警に見つかり、辱めを受けます(7)。3：3で語られていたことを重ね合わせることができます。

そのためおとめは、エルサレムのおとめたちに、自らの被害を訴えることはせず、恋しい人を探してほしいと頼みます(8)。

そして、恋しい人へのおのろけが始まります(10-16)。ここでは、花婿が花嫁の体を褒めたように(4:1～7)、おとめは恋しい人の目、頭、髪、目、頬、手、足、口と眺め、褒めていきます。これは、すれ違いはありましたが、おとめが恋しい人を思う思いに、変化がないことを示しています。

そして、おとめと恋しい人が、互いに愛し合っていることが告白されます(6:2-3)。

ここで語られていることは、どこの夫婦・家庭でも起こるすれ違いです。しかし雅歌が私たちに語りかけるのは、一つのすれ違いが生じても、不平・不満を語り引きずることなく相手への愛を確認することです。

今に生きる私たちには、罪が伴います。相手を裏切り傷つけてしまいます。そうした中でも愛に生きる者は、相手の罪を赦し、受け入れる包容力が伴います。主なる神に愛され、キリストの十字架の御業により罪が赦されたキリスト者は、私たち自身が罪赦されたように、隣人の罪を赦し、受け入れることが求められています。参照：第七戒の積極的理由(ウェストミンスター大教理問138)。

第三の区分において、雅歌の頂点を迎え、二人が結婚を行い、生活を始めました。そして前回、第四の区分に入りました。青年がいなくなったことに対するおとめの歌が謳われていました。続けて、若者の歌が歌われます(6:4-9)。若者は、「恋人よ、あなたはティルツァのように美しく　エルサレムのように麗しい」と語ります(4)。

「ティルツァ」とは、ヨシュアによって占領されたヨルダン西側の31人の王の町の最後に記されています(ヨシ12：24)。そして、ソロモンの死後、王国が分離すると、北イスラエル王国の首都とされる町です。青年は、目の前にいる美しい女を、この町を「エルサレム」と並べて、美しいと讃えます。ヘブライ語では、都市は女性名詞ですが、おとめの美しさを都市で例えています。

若者は続けて「旗を掲げた軍勢のように恐ろしい」(4)と語ります。美しい女性を「軍勢・恐ろしい」といった言葉で表現します。榊原先生は、「恐ろしい」という言葉と同じ語根の言葉として、神顕現に伴う恐ろしさを表すことに用いられていることを指摘します（創世記15:12、出エジプト15:16)。つまり、畏怖の念を起こさせるような美しさ・畏れ多いことを表現しています。

続けて8節では「王妃が60人、側女が80人　若い娘の数は知れないが　わたしの鳩、清らかなおとめはひとり」と語ります。文字通りソロモンであれば、700人の王妃と300人の側室がいたことが語られています（列王記上11:3)。それと比べれば少ない人数です。ここで語られる60人・80人は、比喩であり、何人いても、妻は夫にとってただ一人、かけがえのない存在であることを表現しています。

この表現は、創世記2章において女が与えられた男が語った言葉を思い出します。男は、それまで自分に合う助ける者を見つけることができませんでした(2:20)。しかし、主が女をお与えくださったときに、

「ついに、これこそ　わたしの骨の骨
わたしの肉の肉。　これをこそ、女（イシャー）と呼ぼう　まさに、男（イシュ）から取られたものだから。」(創世記2:23)と語ります。結婚を行う男と女は、唯一無二の存在です。そして、青年のおとめへの思いは、女たちも同意します(10)。そして、「旗を掲げた軍勢のように恐ろしい」と、4節の青年の言葉を繰り返します。

７章に入り、「シュラムのおとめ」(1)という言葉が繰り返されます。聖書で「シュラム」はここにしか出てきません。神学者たちは、色々と語ります。このような土地は知られていません。そのため、「シュネムの女」つまり、晩年ダビデ王の仕えた女アビシャグのこと（列王上1:3、2:17-25）ではないかとも言われます。しかし、シャロームやソロモンから派生した言葉とすれば、「完成された女」と訳せるのではないかと、榊原先生は解釈しています。8:10では、シャロームを「満足」と訳します。

また、「マハナイムの踊り」と訳す所は、新改訳では「二つの陣の舞」と普通名詞として訳しています。6:4,10で軍勢に例えていることからすれば、青年とおとめが向かい合い、踊っていると考えることもできるのではないかと思います。

おとめの踊りに見とれている若者は、ステップを踏んでいる足から頭へとなめ尽くすように褒めていきます。2サンダル・もも、3秘められた部分・腹、4乳房、5首・目・鼻、6頭・髪。そして乳房に見とれ、息、口をなめ尽くすように見ています。そして9・10節では、乳房を触りたい、口づけをしたいという思いが歌われています。

ここでおとめは、若者の求めに答えます。野に出て、花房、ぶどう畑、ぶどうの花、ざくろのつぼみ、恋なす、と果実に例えていますが、性的な交わりを行いたいことを表した表現となっています。

そして８章に入ると、実際に二人が交わり合いおとめの言葉をとおして、二人が交わり合う状況が語られていきます。

罪の中にあるこの世においては、性的な乱れが顕著です。そのことを、聖書は人間の堕落の直後から繰り返し語り、人を戒めてきました。そのため、キリスト者の中には、性的な関係に対して誤解を持っておられる方もいるかもしれません。しかし主がお与えくださった男と女の関係は、互いに唯一無二の存在であり、二人の間にあっては、性的な交わりにより、互いの愛を確かめ合うことができるのだということを、私たちはこの雅歌を読み、改めて確認することができるのではないかと思います。

愛を誓い合い、夫婦となった二人ですが、最後の段落で、さらに夫婦の仲を確認し、強められいく状況が語られていきます。

1～7節は「とがめたりはしないでしょう」(1)で始まり、「その人は必ずさげすまれる」(7)で終わります。この２つの語は、「さげすむ・あなどる」という同じ語です。

１節では、まだ夫婦となったばかりで、周囲の人たちから十分に認知されていないことを恐れているかのように語ります。兄妹であれば、二人が一緒にいてもだれも咎めたりはしません。しかし結婚したばかりの男女が姦通を犯しているのではないかと、誤って認識されることを恐れています。

しかし二人は夫婦の誓いを行いました。おとめの家に、婿を連れて行きます。おとめは花婿を慕い、交わりを求めます(2-3)。もう二人の愛・交わりを、誰も引き離すことはできません。

５節からは、夫の家に場所を変えます。花婿が、母の胎に身籠もり生まれたように、おとめも花婿と一体となり、新しい生命が与えられることを願います。「刻みつける」「印章」と言った言葉が出て来ます(6)。花婿と花嫁が一体となることを語っているようです（参照：創世記2:24)。

誰も二人を引き離すことはできません。「死」・「陰府」(6)と言った言葉が出て来ます。死・陰府・炎・大水・洪水であっても、二人を引き離すことはできず、財力・権力をもって、二人の中を裂こうとする者こそが、蔑まされ・侮られます(7)。

続けておとめが兄たちとの関係を語ります(8-10)。兄たちにとって妹はいつまでも小さいままで、可愛い・愛らしい存在です。

しかしおとめは兄たちに胸は十分に出ています。そして、彼に十分に満足してもらえるものです、と自慢しているようです。

「満足を与えるもの」(10)と語るのは、「シャローム(平和・平安)」です。そして「シャロームの人」を意味する「ソロモン」を出してきます(11)。バアル・ハモンという地名は何を指すのか分かりませんが、広大な土地にぶどう畑が広がっていたことでしょう。そしてソロモンは700人の王妃と300人の側室がいました（列王記上11:3)。

それに対して男は、「これがわたしのぶどう畑」と語り、「銀一千はあなたの取り分」であり、自分は何もありません。しかしおとめがいます(8:5)。何にも代えがたい存在です。独占状態です。このことを男は誇らしげに歌います。

最後に夫婦の会話が語られます(13-14)。夫がおとめに、「友だちがあなたの歌に耳を傾けているから、私にも聞かせてほしい」と呼びかけると、おとめは、「かもしかや子鹿のように、二人で山を駆け巡りましょう」と呼びかけて、終えます。

主なる神が、最初に人を男と女に創造されましたが、創世記には記されていない、罪のない世界での夫婦の秩序を、雅歌は語ってきたのではないかと私は思います。

これで雅歌を読み終えます。榊原康夫は「雅歌を読む」の最後「12.正典としての雅歌」を記します。一部を紹介します。

「このような非神話化はヤハウェが創造と摂理の絶対的な唯一神であられ、他のすべての存在も生きものもその動きもすべては神ではなく被造物に過ぎないとみるクールな世界観・自然観・人間観を基礎としてこそ、成り立っているのでしょう。今から二千数百年も昔の雅歌が、恋愛や結婚や性生活に全く宗教色を持ち出さないで歌うことができていることこそ、逆にどんなに大きな神の宗教が背景にあったかを暗示する、聖書の栄光ではなかろうか、という気が私にはするのです」(p219)。

「もう一つ、雅歌を読んで観ずる顕著なことは、この歌において愛し合う男と女の愛の命やその成長が自然の植物や動物の命とその開花に美しく調和していて、人間と自然とが見事な統一ある世界をなしている、という美しさです。ここでは、人の罪への刑罰として起こった人間と自然との対立（創世記3:14-19）が救済されているかのように見えます」(p220)。

「更にもう一つ、雅歌を熟読してから次のイザヤ書以下の預言書に読み進むと、預言者たちが花婿と花嫁あるいは男と女に神とイスラエルをなぞられて語る説教が、手に取るようにわかるようになります。ヤハウェとイスラエルをそのような夫婦や恋人に例えて語る預言は、特にイザヤ、エレミヤ、エゼキエル、ホセアの書に顕著です。そうして、それが必ずしもカナンのバアル宗教から借りたものでなく、雅歌に描かれるイスラエルの男女の愛の姿を背景としていることが分かるので、雅歌は大変重要です」(p222)。